

令和 6 年 6 月 27 日現在

機関番号：17301

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20H01248

研究課題名（和文）「アルプス神話」の形成と脱構築 スイスの国民統合における文化的表象のポリティクス

研究課題名（英文）Formation and deconstruction of the "Alpine myth": the politics of cultural representation in the national integration of Switzerland

研究代表者

葉柳 和則 (Hayanagi, Kazunori)

長崎大学・多文化社会学部・教授

研究者番号：70332856

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 13,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の課題は、アルプス山脈に関する文化的表象および政治的・学術的言説を対象として、アルプスがスイスの集合的アイデンティティの形成と深く関与していることである。18世紀のアルプスはヨーロッパ全域にとっての「崇高と美」の場所であった。独立性が高く、言語・文化的に多様な諸州の連合体であるスイスは、いわば「ヨーロッパのモデルとしてのスイス」という自己規定をすることで、アルプスを「領土化」しようとした。本研究は、芸術家と知識人によるアルプスの自然描写、文化担当大臣・エッターの講演、『ハイジ』の翻訳とアダプテーション、ドイツ山岳映画、デュレンマットの小説を取り上げ、この仮説を検証した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

アルプスを象徴的に「領土化」し、「多様性の中の統一」の空間として表象することは、現代のスイスの国際的イメージ形成に貢献した。しかし、この表象は同時に、戦間期から第二次世界大戦期のスイスにおける「ナチズムへの順応」の動きを隠蔽する作用も持っていた。それゆえ20世紀後半の小説家や劇作家によるアルプス表象は、アルプス神話を脱構築することを目指していた。この神話の功罪を問うことは、スイス国内の文化史にのみ関係するのではない。それは現代ヨーロッパのモットーでもある「多様性の中の統一」という理念と現実との間にある差異が生み出す諸問題の解明へとつながっている。

研究成果の概要（英文）：Using cultural representations and political and academic discourses about the Alps as sources, this study demonstrates that the Alps are deeply related to the formation of Switzerland's collective identity.

As a federation of highly independent and linguistically and culturally diverse cantons, Switzerland sought to symbolically "territorialize" the Alps by self-defining itself as the "model of Europe." This study examined this hypothesis by focusing on the portrayal of Alpine nature by artists and intellectuals, the speeches of the Minister for Culture, Etter, the translation and adaptation of "Heidi," German mountain films, and Duerrenmatt's novels.

研究分野：文化研究

キーワード：表象文化 西洋史 思想史 文化史

## 1. 研究開始当初の背景

ヨーロッパを南北に移動する際の最大の障害物と見なされていたアルプス山脈が、学問的対象となったのはショイヒツァーの古生物学と博物学に始まる。アルプスはハラーによって文学的表現を与えられ、ルソーによって「美と崇高」のトポスとして発見された。その後、ラ・ロッシュやゲーテによるスイス旅行記群、スイス人画家カスパー・ヴォルフによる数々のアルプスの風景画、ベデカーのような近代の旅行ガイドなどによって無数のアルプス表象が生まれ出され、これに関する研究も数多くなされてきた。しかし従来のアルプス表象研究では、スイスを旅したヨーロッパの知識人や芸術家が、いわば外部から捉えたアルプスの姿に焦点を当てる傾向が強く、アルプスを生活圏とするスイス人がアルプスを、内部からどのように意味づけ、表象したのかという視点が欠落しがちであった。

スイスは、長らく独立性の高い自治州の経済的・軍事的利益に基づく連合体に過ぎなかった。1848年に連邦憲法を公布し近代国民国家として出発したスイスの国民統合にとっての最大の困難は、各言語圏が独・仏・伊語という求心力(スイスから見れば離心力)の強い言語圏の一部を成していることにある。たとえば「スイス文学」という枠組みがスイス国外で認識されることは希であり、ドイツ語圏スイスの作家は「ドイツ文学」のなかでローカルな位置に置かれた。国家の境界と言語圏の境界との差異が生み出す「二重の場所」という性格はスイスの文化的生産の根本的アンビバレンスである。ロマンシュ語圏を含む4つの言語圏とカトリック・プロテスタント諸州を統合する視覚的・空間的象徴として意味づけられたアルプスの表象が、スイスの国民統合の過程においていかなる変遷を被ったかを問うことにより、超域性の保持と再領土化の葛藤が多角的に照射される。そこから「中立国」スイスの心性史が描かれるのである(以下、本報告ではロマンシュ語圏については措く)。

スイスの国民統合が最大の危機に直面したのは、ドイツでナチスが政権を握り「強制的画一化」を推進した時代である。このときスイスでは、ナチスのイデオロギーに抗するために独仏伊語という3つの言語圏を統合する精神的支柱が求められ、「スイス的なもの」が模索されると同時にそれを守るための文化運動「精神的国土防衛」が発生し、政府の文化政策として採用された。この運動において改めて強調されたのが超域的なトポスとしてのアルプスである。アルプスはナチスが目指す「ヨーロッパ新秩序」とは「別様のヨーロッパ」、多様性のトポスとして聖域化され、同時にドイツ内外の亡命知識人からは「非-ナチスのドイツ語圏」として、1920年代以前のドイツ語文化の継承と保存の場という役割が投影されたのである。

このような背景を踏まえ、本研究はスイス内部に視点を置いたアルプス表象を、主として芸術的プロダクトを対象として一貫した視点から解明する。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、文学作品、演劇、映画、絵画等が産出したアルプス表象が、19世紀以降スイスの「国家神話」ないし「大きな物語」へと変容し、ナチス時代に変質し、戦後にはその功罪により脱神話化されていく一連のプロセスを文化史的観点から描き出すことである。

「神話」という視点に立つとき、19世紀後期から20世紀前期の代表的アルプス表象であるシュピーリの小説『ハイジ』(1880-81)、マックス・フリッシュの従軍記『背囊からの紙片』(1940)、チューリヒ劇場による『ヴィルヘルム・テル』の国民劇的演出(1939-45)、レオポルト・リントベルク監督の精神的国土防衛映画『最後のチャンス』(1945)といった、従来は別々の文脈で論じられてきた作品に通底する「アルプス神話」形成のモメントを見出しうる。

第二次世界大戦後になると、「アルプス神話」が覆い隠してきたものが顕在化し始める。スイスがセルフ・イメージの核心に据える「多様性」の中にユダヤ人は含まれていたのか、スイスはナチズムに感染しなかったのか。これらは「スイスの克服されざる過去」として問われ続け、その文学的表現として、フリッシュを初め、フリードリヒ・デュレンマツト、アドルフ・ムシュクラからスイスの作家たちは「アルプス神話」の脱構築を主題化し続けた。

以上のように本研究は、スイスの国民統合という観点を軸に、「アルプス神話」に基づく集合的アイデンティティ形成からその脱構築へと至る文化史と心性史を捉える初の試みとなる。

## 3. 研究の方法

本研究では、3つの言語圏の関係性を視野に入れつつ、ドイツ語圏の文化的表象を中心的に扱う。なぜなら「二重の場所」というアンビバレンスは、ナチス・ドイツの台頭によって最も顕著なものとなるからである。以上により、スイスの国民統合とアルプス表象の文化史を4つのフェーズ(局面・位相)に区分する。(1)アルプスが「発見」されヨーロッパにおける「崇高と美」のトポスとなっていく位相、(2)アルプス表象が神話化され国民統合の装置として機能し始めた位相、(3)「アルプス神話」と国土防衛が結びつくことで「別様のヨーロッパ」としてのスイスというアイデンティティの確立が求められた位相、(4)そして「アルプス神話」のイデオロギ的性格が暴露され、「スイスの克服されざる過去」が前景化する位相、である。以上を踏まえて、本研究は次の5つの柱を立てる。

18 世紀における学的対象としてのアルプスの「発見」とその展開((1)、(3) (4))  
国民国家成立以前の交通の交差点であるスイスの「中立性」と辺境性を軸に「アルプス」をめぐる表象ポリティクスの変容を追う(担当: 中村靖子)。

「ハイジ神話」による「アルプス神話」のスイス化((2) (4))  
「聖域を侵したアニメ」としてスイスが示す距離感や「ハイジ展」(2019、スイス国立博物館)における再検討の動きから、スイス発のアルプス表象をナショナルな「アルプス神話」へと接続する理路を解明する(担当: 川島隆)。

フリッシュの初期従軍記から砲兵としての「遺言」に至るまで((2) (4))  
フリッシュと精神的国土防衛の関わりを軸に、「アルプス神話」からの脱却を目指す冷戦末期の文化的ポリティクスの交叉を読み解く(担当: 葉柳和則)。

スイスの「精神的国土防衛映画」における「ベルリンからの解放/脱却」((4))  
20 世紀の山岳表象において社会から隔絶した異世界、非ナショナルな空間となった「アルプス」の再領土化の動きを、映画を手がかりにナチスとスイスの双方から分析する(担当: 中川拓哉)。

デュレンマットの『チベットの冬戦争』における「起こりうる最悪の神話」((3) (4))  
デュレンマットの晩年の作品『チベットの冬戦争』(1981)を、アルプス表象によって描かれた非ナショナルで非-歴史的・越境的空間、社会から隔絶した異世界という要素が、第三次世界大戦後の時空間と交叉する状況をシミュレートしたテキストとして再解釈する(担当: 増本浩子)。

#### 4. 研究成果

具体的な研究成果は、次項で論文・著書・口頭発表を挙げるため、ここでは概要を説明する。

##### (1) 総論

本研究は、19 世紀から 20 世紀にかけてのアルプスのイメージをめぐる文化的表象が持つ政治性を前景化した。17 世紀前半まで、スイスの山々は旅人にとって醜く危険で巨大な突起物だったに過ぎない。しかし、17 世紀末になると、アルプスのイメージは一変する。ショイヒツァーの「聖なる自然」という言葉は、この変化を顕著に表している。19 世紀になると、国民国家は国民統合のためのシンボルを「発明」し始めた。独立性と固有性の強い諸州(ないし邦)の緩やかな連合体であるスイスにとって、この問題はいっそう喫緊の課題であった。スイスの 3 つの言語圏にまたがるアルプス山脈が、多言語・多文化の連邦国家のシンボルとなったのは、この課題ゆえである。20 世紀に入り、「総力戦」の時代が始まると、スイスのナショナル・アイデンティティはさらに強調された。『ハイジ』のフランス語翻訳ないしアダプテーション、ドイツの山岳映画におけるアルプスのイメージの「スイス化」、スイスの文化的国策である「精神的国土防衛」におけるアルプスの「再領有化」などは、こうした状況を反映したものである。しかし、第二次世界大戦が終わり、近隣の全体主義国家が消滅すると、このアルプスのイメージは、フリッシュやデュレンマットといった作家たちによって、スイスのナチズムに対する「抵抗」を強調し、「順応」を不可視化するイデオロギー装置として脱構築されていった。

##### (2) 文学における虚構の風景と自然としての山岳

マージョリー・ホープ・ニコルソンの「Mountain Gloom and Mountain Glory: The Development of the Aesthetics of the Infinite」(1997) は、古代においてアルプスの山々がどのように認識され、どのように言及されていたかを年代風に描いている。この文献は、人々のメンタリティが時代とともにどのように進化してきたかについての洞察を与えてくれる。ニコルソンによれば、山岳は長い間、居住に適さず、危険で恐ろしいものとして避けられてきた。しかし、近代科学の発達とヨーロッパ地域の交通手段の拡大・充実により、アルプスのイメージは根本的に変化した。本研究では、ニコルソンの提案に基づき、アルプス表象が神学的な自然観の表象から、近代科学に基づく地理学的情報を反映した風景の表象へと変遷していく過程をたどった。具体的には、18 世紀初頭のショイヒツァーの「聖なる自然」から、ゲーテのスイス旅行、シラーの文学作品における自然描写を経て、19 世紀初頭のアレクサンダー・フォンボルトによるアルプスの統計学的・自然地理学的記述への変遷を検証した。これによって、(3) 以下のテーマの歴史的・文化史的土台作りが行われた。

##### (3) 「ハイジ神話」の精神的国土防衛への動員

ヨハンナ・シュペーリ(1827-1901)の小説『ハイジ』は、現在までに 70 近い言語に翻訳され、スイスの「国民的神話」とさえ言われている。世界的な現象としての『ハイジ』には、数え切れないほどのメディア・コンバージョン、短縮版、アダプテーション版などがあり、時にはシュペーリの原作から大きく逸脱することもある。シャルル・トリッテン(1908-1948)によるフランス語版の続編は、その典型的な例といえる。ハイジは内気な少女に成長し、(作者のヨハンナ・スピリ自身と同じように)フランス語圏スイスの寄宿学校に通い、村の学校の教師となり、庭師

となった山羊飼いのペーターと唐突に結婚し、3人の子供の母となり、最後には多くの孫の祖母となる。このアダプテーションによって、家族のサーガが生まれた。そこには、実際には『ハイジ』とは関係のないシュペーリの短編のいくつかが組み込まれている。トリッテンのハイジは非常に愛国的な女性であり、二度の世界大戦という苦難の時代を、善良な女性、善良な母親、善良なスイス市民として経験した。このようにして、「精神的国土防衛」において求められる女性像がアダプテーションのなかのハイジに投影されたのである。

#### (4) 戦間期のモダニティの繁栄としてのアルプスイメージ

1920年代の初め、新しいジャンルの映画としての山岳映画が登場し、観客や批評家のあいだで高い評価を得た。スタジオ撮影が一般的だったワイマール共和国の他の映画とは異なり、山岳映画はアルプスの高山で実際に撮影された壮大で危険な風景映像を観客に供した。ジークフリート・クラッカウアーがその著作『カリガリからヒトラーへ』で強調して以来、この「ドイツだけのジャンル」は、来るべき国家社会主義イデオロギーの兆候とみなされてきた。クラッカウアーによれば、ドイツの山岳映画は、その特徴的な演出を通して、総統崇拝につながる非合理的で反近代的な美学を表現している。すなわち、神秘的なアルプスの世界、氷河や岩の神格化、エリート登山家の仲間意識などである。しかし近年の研究は、山岳映画のモダニティに光を当てている。本研究では、山岳映画におけるアルプスのイメージを構築する視線について考察した。山岳映画の生みの親であるアーノルト・ファンク(1889-1974)は、決して反近代主義者ではなく、むしろ最新技術の支持者であった。ファンクの山岳映画の分析によって、第一次世界大戦後のアルプスの世界が、近代という経験のみならず、それと同時に都市化からの逃亡先を提示したことが明らかになった。

#### (5) 「アルプス共和国」と「精神的国土防衛」

1930年代、スイスはナショナル・アイデンティティの危機にあった。連邦の文化担当大臣、フィリップ・エッター(1891-1977)は、愛国的な文化運動「精神的国土防衛」を国策に昇格させることで、この危機を乗り越えようとした。彼が描いたスイス像は、「アルプス共和国」あるいは「もうひとつのヨーロッパ」であった。本研究では、1930年代にエッター自身が執筆した講演原稿をもとに、このようなアルプスのイメージがどのような過程を経て生まれたのかを検証した。

国境を越えて到来する2つの危機、すなわち、ナチズム版の「大ドイツ主義」と「未回収のイタリア」という膨張政策に直面したスイスは、これらふたつの全体主義国家と言語と文化を共有しているがゆえに、自国の文化の独自性をいっそう際立たせなければならなかった。このような国際情勢のなかで、「精神的国土防衛」が国策化された。この政策によって、エッターはドイツの「強制的画一化」(社会のあらゆる側面に関する全体主義的な統制と同調)政策に対抗する論理を模索した。その際、彼はアルプスのイメージをこの運動の中心に据えた。スイスの3つの言語圏にまたがるアルプスは、国民統合の象徴として最もふさわしい空間だった。その結果、ナチス・ドイツの「新ヨーロッパ」とは別のヨーロッパ、すなわち、多言語・多文化の「アルプス共和国」こそが、第二次世界大戦期のスイスの「国家モデル」となった。

アルプス表象と「精神的国土防衛」の関係について解明した上で、この運動を背景にして文筆活動を行ったフリッシュの「アルプス表象」について解明する予定だったが、「精神的国土防衛」想定外に複雑な運動であったため、本研究の期間中には、部分的に言及するにとどまった。

#### (6) スイス軍は誰/何と戦っているのか

フリードリヒ・デュレンマット(1921-1990)は、第二次世界大戦中にディストピア小説『チベットの冬戦争』(1981)を構想し、1970年代になってそれを完成させた。第三次世界大戦で世界の大半が核兵器によって破壊された後、一人称の語り手であるスイス人傭兵は、次なる戦争のためにチベットに赴く。戦闘はヒマラヤ山脈の地下にある迷路のようなトンネルで行われ、全員が同じ白い軍服を着ているため、敵味方の区別がつかない。かつてスイス人が自由と独立のために、ハプスブルク家、ナポレオン、ヒトラーといった侵略者と(軍事的に、あるいは精神的に)戦ったように、第三次世界戦後のスイス人もまた外敵と戦うことになる。しかし、物語の中では、一人称の語り手が戦っている敵が誰なのかが判然としない。1970年代、スイスはいったい誰と戦っていたのだろうか?冷戦期のスイスの具体的な国防政策に鑑みたとき、デュレンマットがこの作品で取り上げた戦争の描写は、国境を侵犯する現実的な「敵」が消滅した時代に、なお精神的国土防衛を国策として掲げ続けるスイスの国家思想の脱構築を目指していることが明らかとなる。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計10件（うち査読付論文 8件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 7件）

1. 著者名 葉柳和則	4. 巻 38号
2. 論文標題 全体主義に抗する全体主義? ;オーストリア併合前夜におけるフィリップ・エッターの社会-文化構想	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 独文学報 (大阪大学ドイツ文学会)	6. 最初と最後の頁 29-50
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 増本浩子	4. 巻 第50号
2. 論文標題 地下にあるもうひとつのスイス デュレンマットの短編小説『チベットの冬戦争』におけるアルプスの表象	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 神戸大学文学部紀要	6. 最初と最後の頁 1-21
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 川島隆・ちばかおり・島口直弥	4. 巻 62
2. 論文標題 ヨハンナ・シュペーリ原作"ハイジ"の視覚化の歴史と現代的意義 浜松市美術館完全オリジナル企画「ハイジ展 - あの子の足音が聞こえる - 」から	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 京都大学文学部研究紀要	6. 最初と最後の頁 497-517
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 中川拓哉	4. 巻 第6号
2. 論文標題 「文学者としての従軍報告 岸田國士『北支物情』・『従軍五十日』から」	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 『名古屋大学人文学研究論集』	6. 最初と最後の頁 155-174
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.18999/jouhunu.6.155	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 葉柳和則	4. 巻 36/37(合併)
2. 論文標題 カトリック保守主義と精神的国土防衛：スイスの親ナチ運動へのフィリップ・エッターの対応を軸に	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 独文学報（大阪大学ドイツ文学会）	6. 最初と最後の頁 27 - 49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中村靖子	4. 巻 5(1)
2. 論文標題 感情を創成する：文学と歴史	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 エモーション・スタディーズ	6. 最初と最後の頁 74-84
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20797/ems.5.1_74	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Takashi Kawashima	4. 巻 1
2. 論文標題 Franz Kafkas Zwei Tiergeschichten und der "juedische Selbsthass" in seiner Zeit	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Akten des JGG-Kulturseminars	6. 最初と最後の頁 315-331
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11282/jggks.1.0_315	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 HAYANAGI Kazunori	4. 巻 65
2. 論文標題 BORDERING ON TOTALITARIANISM: PHILIPP ETTER ' S DISCURSIVE SPACE	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 PSYCHOLOGIA	6. 最初と最後の頁 296 ~ 310
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.2117/psysoc.2023-b043	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 中川拓哉	4. 巻 55
2. 論文標題 「運動のスペクタクル 「アトラクションの映画」としてのドイツ山岳映画分析」	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 ドイツ文学研究	6. 最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 NAKAMURA Yasuko	4. 巻 65
2. 論文標題 DELAY AND LAG IN FREUD 'S THOUGHT: FROM PROJECT FOR A SCIENTIFIC PSYCHOLOGY TO MOSES AND MONOTHEISM	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 PSYCHOLOGIA	6. 最初と最後の頁 311 ~ 334
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.2117/psychoc.2023-B040	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計14件 (うち招待講演 4件 / うち国際学会 7件)

1. 発表者名 葉柳和則
2. 発表標題 全体主義に抗する全体主義? ;第二次世界大戦勃発期のスイスにおける社会構想
3. 学会等名 日本国際文化学会第21回全国大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 増本浩子
2. 発表標題 現代スイスを理解するための基礎知識
3. 学会等名 広島独文学会主催第3回レクチャー講演会 (オンライン開催) (招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 中村靖子
2. 発表標題 「人間・社会・自然の来歴と未来：「人新世」における人間性の根本を問う」研究活動報告
3. 学会等名 課題設定による先導的人文学・社会科学研究推進事業シンポジウム「未来社会を見据えた人文学・社会科学分野における 学術知共創の課題について
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 川島隆
2. 発表標題 『ハイジ』イラスト化の歴史 浜松市美術館「ハイジ展」から考える
3. 学会等名 スイス文学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 川島隆
2. 発表標題 世界のハイジ/日本のハイジ
3. 学会等名 浜松市美術館（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 増本浩子
2. 発表標題 スイスの精神的国土防衛と文学におけるアルプスの表象 デュレンマットの『チベットの冬戦争』を中心に
3. 学会等名 神戸大学人文学研究科主催国際ワークショップ「ディコロナイゼーションと他者」（国際学会）
4. 発表年 2022年



1. 発表者名 Hiroko Masumoto
2. 発表標題 Duerrenmatts Theater: Huerden der Rezeption
3. 学会等名 Internationale Tagung zum 100. Geburtstag von Friedrich Duerrenmatt (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 中川拓哉
2. 発表標題 アルプスをめぐる文化戦：戦間期劇映画におけるアルプス表象のドイツ・スイス比較
3. 学会等名 日本国際文化学会第20回全国大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 中川拓哉
2. 発表標題 オリンピックと「国民」 映画『国民の誓』(1938)を例に
3. 学会等名 日本国際文化学会第20回全国大会共通論題「オリンピックと政治宣伝 1930年代の事例を中心に」(招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Kazunori HAYANAGI
2. 発表標題 Das Alpenbild als ein anderes Europa
3. 学会等名 INTERFACEing 2023 “Changing Paradigms: Humanities in the Age of Crisis (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Hiroko Masumoto
2. 発表標題 Gegen wen kaempft die Schweizer Arnee? Feindbilder in Duerrenmatts Erzaehlung "Der Winterkrieg in Tibet"
3. 学会等名 INTERFACEing 2023 " Changing Paradigms: Humanities in the Age of Crisis ( 国際学会 )
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Takuya Nakagawa
2. 発表標題 Bergbild von den Staedtern. Alpenbild als Reflektion der Modernitaet zur Zwischenkriegszeit
3. 学会等名 INTERFACEing 2023 " Changing Paradigms: Humanities in the Age of Crisis ( 国際学会 )
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Takashi Kawashima
2. 発表標題 Mobilisierung des Heidi-Mythos zur "Geistigen Landesverteidigung" bei Charles Tritten
3. 学会等名 INTERFACEing 2023 " Changing Paradigms: Humanities in the Age of Crisis ( 国際学会 )
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Yasuko Nakamura
2. 発表標題 Berge und fiktive Landschaften in der Literatur--Der Uebergang der menschlichen Mentalitaet gegenueber Natur
3. 学会等名 INTERFACEing 2023 " Changing Paradigms: Humanities in the Age of Crisis ( 国際学会 )
4. 発表年 2023年

## 〔図書〕 計4件

1. 著者名 中村靖子編	4. 発行年 2022年
2. 出版社 春風社	5. 総ページ数 503
3. 書名 予測と創発 理知と感情の人文学	

1. 著者名 葉柳和則・中村靖子・増本浩子	4. 発行年 2021年
2. 出版社 春風社	5. 総ページ数 380
3. 書名 ナチスと闘った劇場	

1. 著者名 川島隆	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 276
3. 書名 ドイツ語と向き合う	

1. 著者名 ちばかおり, 川島 隆	4. 発行年 2022年
2. 出版社 河出書房新社	5. 総ページ数 143
3. 書名 図説アルプスの少女ハイジ 増補改訂版 : 『ハイジ』でよみとく19世紀スイス	

## 〔産業財産権〕

〔その他〕

「ハイジ展：あの子の足音がきこえる」浜松市美術館（2022年7月9日～9月11日）

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	増本 浩子  (Masumoto Hiroko)  (10199713)	神戸大学・人文学研究科・教授    (14501)	
研究分担者	川島 隆  (Kawashima Takashi)  (10456808)	京都大学・文学研究科・准教授    (14301)	
研究分担者	中川 拓哉  (Nakagawa Takuya)  (10829906)	名古屋大学・人文学研究科・博士研究員    (13901)	
研究分担者	中村 靖子  (Nakamura Yasuko)  (70262483)	名古屋大学・人文学研究科・教授    (13901)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------

スイス	スイス国立図書館	マックス・フリッシュ・アーカイブ	ハイジ資料館	他1機関
-----	----------	------------------	--------	------